泊の御宿, 本陣について

越中国における藩主の休憩・宿泊施設に関する研究 (その2)

OYADO AND HONJIN IN TOMARI DURING THE EDO PERIOD

A study on the nature of lodgings in which daimyo stayed and rested in Ettyu (Part 2)

増田 晴夫*

Haruo MASUDA

This paper considers, through the case studies of oyado and honjin, early-modern boarding facilities in the districts of Tomari, the nature of Edo Period lodging facilities in Ettyu wherein daimyo stayed and rested. In the early Edo Period, Tomari suffered from frequent high ocean waves and consequently residents were forced to relocate. From the 1710s, oyado finally came to be opened. By the 1750s there were two oyado in Tomari, one for hosting the lords of the Kanazawa clan and the other for the lords of the Toyama and Daishōji clans. These oyado were constructed as having two distinct spaces: an area for the visiting lords and an area for the building's residents. During the Itō family's tenure overseeing the lodgings for the Kanazawa, the Kanazawa contributed to construction costs for the development of facilities in which they sojourn. However, the Itō were not classified as otaya, but instead considered oyado.

Keywords : Oyado, Honjin, lodging, Kanazawa clan, Daishōji clan, Toyama clan

御宿, 本陣, 休泊施設, 金沢藩, 大聖寺藩, 富山藩

1. はじめに

江戸時代の越中国は互いに姻戚関係にある金沢藩と富山藩が支配していた。そして、同じく前田氏一族である大聖寺藩主を含めた、前田氏3藩主だけが越中国を通して参勤交代を行っていた¹⁾。この支配者と通行者の関係は不特定多数の大名が利用した五街道とは異質であり、休泊施設や宿場町に影響を与えていたことが明らかになっている²⁾。藩政期における地方の特殊な交通事情が建築や都市計画に及ぼした影響をより明白にするためには、さらに個別事例を提示していくことが重要となってくる。

一般的に藩主の休泊施設は本陣や御宿と呼ばれるが、前田氏3藩域の加賀国、越中国、能登国では「御旅屋」と呼ばれる施設でも藩主が休むことがあった。前稿では高岡と今石動の御旅屋が他藩の御茶屋に近い建築形態であることを示した³⁾。

本稿で検討する泊は金沢藩領新川郡に属していた(図1)。高波被害に悩まされ、17世紀中頃から18世紀初頭までに2度移転している。藩政初期の北陸道は泊、入膳、三日市という経路のみであったが、夏の雪解け時には黒部川河口が増水し、渡河が困難になった。そのため、寛文2年(1662)に上流に愛本橋を架橋し、翌年に浦山と舟見を宿駅に指定することで、新たに泊、舟見、浦山、三日市という経路を設けた。この分岐路は夏季に用いられ、夏往来と呼ばれていた。しかし、冬季には深雪によって通行が難しく、前述の富山湾沿岸を通る北陸道が利用され、こちらは冬往来と呼ばれていた。

泊では小沢屋と三左衛門家、庄助家、伊東家の3家が藩主の休泊施設を担っていた。

2. 泊の移転⁴⁾

近世初期の泊は笹川東岸に位置していた。文化年間(1804-17)作成とみられる「新川郡婦負郡見取絵図」⁵⁾には、「境」と「泊町」の間から「笹川」が富山湾に流れ込み、その東岸に「古泊り村跡当時家二軒御座候」と記されている。笹川東岸は「古泊」と呼ばれ、文化年間には2軒の民家が残るのみであった。

理由は定かではないが、正保4年(1647)より住民間で移転についての協議が行われ、対岸の笹川西岸へ移ることが決まる。この移転は承応3年(1654)から明暦2年(1656)までに完了したとみられ、移転後の泊が「越中国新川郡泊町高波破損ノ図」⁶⁾(写真1)に描かれている。笹川西岸の河口付近に位置し、西端には木流川が流れ、東西に貫通する北陸道の南側が「上ハ町」、北側が「下町」となっている。また、防火対策のために「上ノ火除」「下ノ火除」(写真1③④)という幅の広い道が町並みに直行して南北に通っている。この絵図は正徳3年(1713)の高波被害を新川郡奉行高島源蔵に報告するために作成され、町の7割にあたる130軒が罹災している。しかし、以前より高波被害は深刻で、正徳3年時には89軒が被災していた(写真1⑦⑧)。彼らの仮設住宅街が「裏屋通町」として裏手に3ヵ所に分けて建設されていた。

4年後の享保2年(1717)にも泊は高波に襲われ、壊滅的な被害を被る。すでに正徳3年には移転の願書が提出されていたが、この高波を契機に本格的に動き始める。住民側は海岸に近い移転先を希望したが、藩側は恒久的に宿駅機能を維持できるように、高波被害に遭いにくい内陸部を選定し、享保3年に海岸から離れた沼保村と

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 修士(工学)

Dept. of Architecture, Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, M. Eng.

図1 加越地方と北陸道

- 写真1 凡例
 ①此通り下町与申候 ⑤御制札
 ②此通り家並上ハ町与申候 ⑥裏屋通町
 ③上ノ火除 ⑦先年方大波ニ而家潰候者小屋懸仕罷有候
 ④下ノ火除 ⑧山手の方裏屋数八拾九軒

写真1 越中国新川郡泊町高波破損ノ図（正徳3年、部分）

写真1～3 共通凡例

- A：御給人蔵
 B：御収納蔵
 C：妙輪寺
 D：松林寺
 E：常光寺

写真2 凡例

- ①入膳往還道 上町入口
 ②舟見往還道
 ③火除水溜
 ④下町入口
 ⑤往還道
 ⑥用水

写真2 泊町新屋敷替絵図（享保年間、部分）

写真3 凡例

- ①是より西へ新屋敷 ③伊東彦四郎 ⑤輪覚寺
 ②小澤屋与三左衛門 ④高札 ⑥馬場 文政元年寅初テ立ル

写真3 泊町屋敷図下図（文政2年）

荒川新村のなかに建設した。移転後の、享保年間（1716~35）の泊が「泊町新屋敷替絵図」⁶⁾（写真2）に描かれている。木流川西岸から西へ町並みが伸び、北側は海岸に接していない。より西方へ、そして内陸部に移転したことが理解できる。今回、新たに南に折れて舟見へと通ずる往還道が設けられ（写真2②）、その分岐点が町内に置かれた。移転前には裏手にあった収納蔵と給人蔵が木流川東岸に配置され、火災を考慮して町並みから離されたものと考えられる。さらに「火除」という幅の広い道も「火除水溜」（写真2③）という防火用水になり、より防火対策が強化されている。正徳3年以前に被災した住民の仮設住宅街が南裏手につくられていたが、移転後は北側に2列に分けて計画的に建設されている。

文政2年（1819）の「泊町屋敷図下図」⁹⁾（写真3、「文政町絵図」と略称）でも、木流川東岸に給人蔵と収納蔵が、そして西岸に町並みがあり、享保期と宿場の位置や形状はほとんど変わっていない。ただ北裏手の2列の住宅地がなくなり、その跡地の一部に「馬場」が文政元年に新設されている（写真3⑥）。また町並みの西端が伸長

され、新しく住宅地が造成された（写真3①）。

3. 小沢与三左衛門家

安政4年（1857）に小沢屋与三左衛門が「先祖由緒并一類書上申帳」⁷⁾（「小沢由緒」と略称）を記している。先祖五左衛門は金沢藩祖前田利家と同郷の尾張国荒子出身で、彼の孫である与右衛門が分家し、与三左衛門家が創始された⁸⁾。

「小沢由緒」に「七世之祖父助右衛門義与右衛門嫡子にて同人代々富山大聖持（寺）御両殿様御宿被仰付」とあり、2代助右衛門より、与三左衛門家は富山藩主と大聖寺藩主の御宿を務めるようになった。正徳2年（1712）頃の大聖寺藩4代藩主前田利章の参勤を記録した道中日記「江戸往来記」⁹⁾に「泊 御宿 小沢屋与三右エ門田嶋や善次」とあり、1710年代には大聖寺藩主の御宿として実際に利用されていたことが確認できる。これは助右衛門が宝永6年（1709）から当主であったこととも合致する¹⁰⁾。「田嶋や善次」も御宿として記されているが、おそらく与三左衛門家が利用できない

事態に備えて、代替施設としてあげられているのであろう。今石動、魚津、舟見についても2軒の御宿が示され、特に今石動では2軒とも上級武士の休泊に対応できる設備を有していた¹¹⁾。

その後も歴代の大聖寺藩主は与三左衛門家を利用している。4代利章は享保3年(1718)にも宿泊し、2代小沢屋助右衛門の御目見を許している¹²⁾。8代利孝は享和2年(1802)の参勤時に¹³⁾、9代利之は文政5年(1822)の帰国時に¹⁴⁾、それぞれ宿泊している。

一方、富山藩主が与三左衛門家を利用した具体的な事例は見当たらない。しかし「小沢由緒」に「御両殿様(富山、大聖寺藩主)方御紋附上下御時服等品々度々拝領被仰付且享保年中方富山様方御米五拾俵被下之年頭御礼等被仰付」と記され、富山藩主からも礼遇されていることから、与三左衛門家を御宿として利用していたと考えてよいだろう。

「小沢由緒」の著者9代与三左衛門は、自身について「同年(安政2年)八月奉願与三左衛門と改名仕候私方先代方富山大聖持(寺)御両殿様御宿被仰付置候」と記している。彼も安政2年(1855)に与三左衛門家を相続し、支藩(富山藩と大聖寺藩)二藩主の御宿を務めてきた家柄であることを述べている。

御宿のほかに、元禄10年(1697)より給人米を管理する蔵宿を代々務めている¹⁵⁾。さらに7代と8代は山廻役にも任じられ、8代は臨時的に十村役も務め、平十村列に叙せられている¹⁶⁾。

「文政町絵図」では、入膳と舟見へ往還道が分岐するT字路の北側敷地に与三左衛門家があり(写真3②)、「富山様御本陣大聖寺様同断 但富山様ヨリ 小澤屋与三左衛門御用地 山廻役」と書き込まれている。富山、大聖寺両藩主の「御本陣」であったが、敷地は富山藩の「御用地」として扱われている。享保3年(1718)の移転直後の与三左衛門家の所在は確認できないが(写真2)¹⁷⁾、移転前より支藩二藩主の御宿を務めており、移転時に新設された舟見への往還道は与三左衛門家の位置を基に定められた可能性がある。また北陸道に面して、東側に与三左衛門家が生活する「長屋」が、西側に「御門」が並んでいる。「御門」の奥に藩主が滞在する施設が配置されていたと推測される。

4. 庄助家と伊東家

1720年前後に記された「加賀越中御旅屋等之義御尋」¹⁸⁾には、加賀国と越中国に点在する金沢藩主の休泊施設が列举され、各施設のそれまでの変遷やその当時の状況が簡潔に記されている。泊に関する記載が全く存在しないので、最後の移転である享保3年(1718)まで金沢藩主の休泊施設は設けられていなかった。

天保10年(1839)に神保嘉一郎は「先祖由緒并一類書上申帳」¹⁹⁾(「神保由緒」と略称)を記し、初代泊町庄助について「延享二年三月居宅間取等就御尋絵図指上候处、謙徳院様御休泊被為在、其以来度々御休泊、白銀等拝領被仰付候」とある。延享2年(1745)に藩から自宅の間取りについて照会があり、庄助が建築図面を提出したところ、金沢藩8代藩主前田重熙(謙徳院)が頻繁に訪れるようになったという。

庄助は三日市の南にある山田村の生まれで、享保3年(1718)に山廻役、同14年に十村役に昇進している²⁰⁾。十村役は地域の有力者が実務者として任ぜられ、数十カ村を「組」と称して、管轄する。彼らは世襲を基本とするが、絶家し、さらに地域内に適任者がいな

い場合には他地域から転任させることがあった。この組が替わることを「引越」、転任する十村役を「引越十村」と呼んでいた。元文3年(1738)に庄助は浦山や三日市を含む山田組から泊と舟見を中心とした泊組へと管轄地域が替わり、引越十村として泊に移住してきたのである²⁰⁾。

庄助は延享4年(1747)に亡くなり²⁰⁾、養子の庄左衛門も入膳周辺を支配する舟見組十村役として入膳に移ってしまう²¹⁾。空席となった泊組十村役の後任には伊東加兵衛²²⁾が任じられる。伊東家は代々砺波郡で十村役を務める家柄であり、加兵衛もまた引越十村として泊に赴任してきたのである。

寛延元年(1748)7月に加兵衛は改作奉行に「暮泊町に引越被為仰付候。泊町之義、先年波崩に而、沼保村領にいづれも家立仕罷在、町続に泊町之領無御座候に付、私義、沼保村領請地仕、家相建度奉存候間、在名沼保村と被仰付被下候様に奉願上候」と願い出る²³⁾。泊に建設用地がないため、沼保村に居宅を建設することを求め、そして8月にはそれが認められている²⁴⁾。「文政町絵図」でも、伊東家(「御扶持人役伊東彦四郎殿」)は北陸道に面しておらず、南裏手の寺院がある筋に並んでいる(写真3③)。

「伊東由緒」に「宝暦四年十月廿八日加兵衛跡組十村役被仰付同六年御宿被仰渡御座鋪廻り御上之御入用を以御普請被仰付其以来年々御休泊被為遊」とある。宝暦4年(1754)に2代次郎左衛門は父加兵衛の跡を継いで沼保組(旧泊組)十村役を拝命し、同6年に御宿に任じられる。御宿を開設するにあたり、藩主が滞在する「御座鋪」の建設には金沢藩が資金を拠出している。

宝暦8年(1758)に金沢藩10代藩主重教が休息のために訪れ、翌年の3月と5月には宿泊している²⁵⁾。その後、11代治脩は寛政8年(1796)から同11年まで²⁶⁾、12代斉広は文化13年(1816)の帰国時に²⁷⁾、13代斉泰は天保6年(1835)から同10年まで(9年は除く)²⁸⁾と嘉永3年(1850)の帰国時に²⁹⁾、14代慶寧は安政6年(1859)の帰国時に³⁰⁾、いずれも宿泊している。

明治3年(1870)に新川県大参事が御旅屋と本陣の廃止を命じ³¹⁾、「泊 伊東彦四郎…右之者共御本陣申渡置候処今般御改革二付右名目被廃仕」と記している。伊東家では次郎左衛門と彦四郎を交互に襲名しており、5代彦四郎が明治まで「御本陣」を務めている。

5. 宗藩、支藩藩主の休泊施設の関係

「小沢由緒」に「安永四年九月月泰雲院様御帰国之砌御本陣指合に付私宅江御宿被為仰付」とある。安永4年(1775)に金沢藩10代藩主重教(泰雲院)は「御本陣」が利用できなかったため、与三左衛門家で休んだ。「御本陣」とは宝暦6年(1756)より金沢藩主の御宿を務めていた伊東家のことである。これは泊に2軒の本陣が同時に存在し、それぞれが宗藩、支藩藩主の休泊施設として使い分けられていたことを如実に示している。

さらに「同年(寛延元年)六月八十五郎様御宿被為仰付同二年三月喜三郎様御宿被為仰付同年四月勢之助様御宿被為仰付」とあり、寛延元年(1748)と同2年に金沢藩6代藩主吉徳の子供達³²⁾が与三左衛門家で休んでいる。延享4年(1747)から宝暦6年(1756)まで金沢藩主の休泊施設がなかったため、支藩藩主の御宿であった与三左衛門家が補っていたと考えられる。このように、両者の関係は固定的ではなく、専用の御宿が利用できない場合には、もう一方の

御宿を利用することができた。一般的な本陣と脇本陣の関係性も有していたといえよう。

6. 伊東家の建築

岩城家史料³³⁾に「濃保村彦四郎殿本家之図」³⁴⁾(図2、「本家図」と略称)、「伊藤彦四郎殿之図」³⁵⁾(図3、「伊藤図」と略称)と題される2枚の平面図がある。ともに年紀がなく、いつの伊東家なのかは明らかでない。伊東家では3代と5代が「彦四郎」を名乗り、3代彦四郎は天明2年(1782)に十村役を拝命しているの³⁶⁾、両図には天明年間以降の伊東家が描かれている。

「本家図」(図2)と「伊藤図」(図3)には主屋のみが描かれる。どちらも凹字型平面で、1列に部屋が並ぶ左棟とL字に折れ曲がる右棟が接続している。右棟の通り土間周辺を除けば、間取りも概ね共通しており、部屋名は一致すると推測される。そこで「伊藤図」の左棟と両棟の接続部分に記載がない場合、本稿では「本家図」の部屋名を使用した。

金沢藩主は「御式臺」「御廣間」「御座間」(図3「御居間」)から構成される左棟に滞在した。「弘化二年伊東由緒」に「同(天保)七

年四月御帰国之砌私宅御旅泊御次江被為召坂井小左衛門殿を以御郡方之儀蟹苗代作等農事之様子御尋ニ付夫々奉申上候」とあり、13代藩主斉泰が「御次」に4代次郎左衛門を呼び、民政や農政に関して対話を行っている。両図ともに「御次」という部屋は見当たらないが、「本家図」(図2)の「御廣間」の座敷飾りが「次床」「次書院床」と表現されていることから、「御廣間」が「御次」に相当し、藩主との対面の場に用いられていた。

右棟では伊東家が日常生活を送っていた。表には代々務めている十村役のための部屋が並んでいる³⁷⁾。「御用場」と鞘の間(図2「算用場」、図3「書物所」)で徴税、予算編成、検察、民事司法など多岐にわたる役務が執行された。また、春と秋の郡奉行による領内巡視の際には十村役が宿泊施設を提供しなければならなかった。伊東家を訪れた郡奉行は「小式臺」から上がり、床を備える「御仕者間」に通された。奥には「茶ノ間」「納戸」「勝手座鋪」「佛間」があり、伊東家のより私的な生活空間がひろがる。

「伊藤図」(図3)では「小式臺」脇から塀が伸びていて、藩主が使用する左棟は敷地内で隔離されていたと考えられる。ただ建物内には1間幅の「通道」があり、「御式臺」と「小式臺」の往来を可能

図2 濃保村彦四郎殿本家之図

図3 伊藤彦四郎殿之図

図4 伊東祐明邸行在所図(明治11年)

- 図4凡例
A: 大臣
参議
宮内卿
大警視
陸軍少将
B: 御巡幸御用係奏任官
供奉各庁奏任官
宮内
式部奏任官
C: 御巡幸御用判任官
宮内省庶務課
宮内省出納課
式部属

にしていた。さらに「伊藤図」では「佛間」「次間」に沿って1間幅の廊下が通っており、両棟間を結ぶ通路が2本あった。

「本家図」の「通場」、「伊藤図」の「入口」の奥につづく空間はともに通り土間である。「本家図」(図2)では、正面のほかに、右側面(「茶ノ間」横の「通場」)にも入口があった。両図の通り土間に面する部屋の間取り、および通り土間の平面形状は大きく異なる。「伊藤図」(図3)の「御用場」と「書物所」は、それぞれ「本家図」よりも土間側が1間広い。両図とも「御用場」の奥には24畳間が控えているが、「本家図」のみ「茶ノ間」と書き込まれている。「本家図」で20畳間の「墓所」がある位置に、「伊藤図」では4室が配置され、床面積も計54畳と拡張している。最も表に近い18畳間が「茶ノ間」である。「本家図」の「茶ノ間」「墓所」の位置関係を鑑みれば、後ろの3室は「墓所」を含む、食と関係のある部屋として使用されていたと思われる。特に土間に面する部屋は20畳間であり、「本家図」の「墓所」と一致する。この4室構成によって、床上部分が土間側に2間半広くなったため、土間も右側に2間半ずれている。

明治天皇は明治11年(1878)に北陸、東海地方を巡幸していて、その際に伊東祐明(6代次郎左衛門)は泊行在所を命じられ、設備を整えている³⁸⁾。「伊東祐明邸行在所図」³⁹⁾(図4、「行在所図」と略称)に凹字型平面の主屋が描かれ、右棟の通り土間周辺の間取りは「伊藤図」(図3)と一致する。さらに「行在所図」では「中露地」や「御料理所」の後方に部屋が付加され、左棟の主座敷も「玉座」「御次」の2室構成となっている。「行在所図」は「伊藤図」を増改築したことが理解でき、おそらく「伊藤図」が藩政期最後の伊東家の姿であったと考えられる。

「本家図」(図2)は「伊藤図」以前の平面図であり、通り土間周辺を増改築することで「伊藤図」に至ったとみられる。特に「御用場」と付属する軸の間が広がられているので、この増改築は十村役を遂行する空間の充実化を意図したものであった。さらに「伊藤図」では「茶ノ間」を奥に移しており、「御用場」の隣室でも役務を行っていたと思われる。

3代彦四郎は天明5年(1785)に無組御扶持人に昇格する⁴⁰⁾。最上位の十村役である無組御扶持人は、特定の組を持たずに、郡全体の十村役を統括した。そのため、元々支配していた組を子供が受け継ぎ、父子が同時に十村役を務めることがあった⁴¹⁾。当初4代次郎左衛門は幼少であったため⁴²⁾、父彦四郎がひきつづき沼保組十村役を兼務していたが、文化8年(1811)に次郎左衛門が引き継いでいる⁴³⁾。同様に4代次郎左衛門が天保6年(1835)に昇格すると、5代彦四郎が三位組(旧沼保組)を受け継いでいる⁴⁴⁾。このように3代彦四郎以降、伊東家では父子が同時に十村役を務める状況がつつき、両者が役務を遂行するためにより空間を必要としたものとみられる。つまり、「本家図」から「伊藤図」への「御用場」を中心とした増改築は、文化8年以降に行われた可能性が高い。

伊東家は「本家図」(図2)→「伊藤図」(図3)→「行在所図」(図4)と変遷したが、いずれも増改築であり、主屋の位置や向きは変わっていない。主屋は敷地の中心にあり、「御式臺」「小式臺」「入口」は北側に並ぶ。

7. おわりに

泊は深刻な高波被害により移転を余儀なくされ、享保3年(1718)に現在の場所に建設された。そのため、藩政初期より宿駅に指定されていたが、藩主の休泊施設は置かれていなかった。

1710年代から御宿が設けられるようになり、1750年代には2軒の御宿を宗藩、支藩藩主で使い分けていた。金沢藩主は引越十村として泊に移住してきた庄助家と伊東家で、支藩二藩主は泊で代々蔵宿を務めていた小沢屋与三左衛門家で休んだ。伊東家と与三左衛門家は「御宿」と「御本陣」の両方で呼ばれていたが、庄助家にはどちらも用いられていない。御旅屋守を拝命する前に金沢藩主の訪問を受けていた事例が浦山と三日市で確認されており⁴⁵⁾、庄助家も正式に御宿に任じられる前に訪問を受けていたのであろう。

越中国の藩主の休泊施設は、管理者(武士と町人)によって、2種類の建築に大別することができる⁴⁶⁾。伊東家は藩主の休泊棟と伊東家の居宅が併設していて、町人が管理した御宿や御旅屋に共通する平面構成であった。一方、敷地は北陸道から離れ、主屋はその中心に配置されており、この街道、敷地、主屋の関係は武士が管理した御旅屋と共通する。伊東家の建築は両者の性質を有していた。

また、越中国では藩が関与する休泊施設を「御旅屋」と呼んでいた⁴⁶⁾。伊東家の藩主の休泊棟の建設には、藩が資金を拠出していたが、伊東家は御宿に分類されており、経営面でも特殊な休泊施設であったといえる。

与三左衛門家は北陸道に面する居宅と御門の奥にある藩主の休泊棟から構成され、越中国の典型的な御宿である。金沢藩領の泊にあって、その敷地は富山藩の御用地として扱われたほか、舟見に通ずる往還道の位置決定にも関与していた。

注

- 1) 忠田敏男『参勤交代道中記 加賀藩史料を読む』(平凡社ライブラリー、平成15年)が詳しい。
- 2) 先行研究として、①岡田悟、永井康雄「金沢藩東岩瀬の御旅屋と富山藩富山城下の本陣について一金沢藩、富山藩の武士休泊施設の研究(その1)」、『日本建築学会計画系論文集』第646号、pp.2669-2676、平成21年)②同「金沢藩の浦山、三日市の御旅屋、御宿について一金沢藩、富山藩の武士休泊施設の研究(その2)」(同第658号、pp.2933-2942、平成22年)③同「金沢藩の魚津の御旅屋、御宿、本陣について一金沢藩、富山藩の武士休泊施設の研究(その3)」(同第668号、pp.1959-1964、平成23年)④同「金沢藩の滑川の御旅屋と桐沢家について一金沢藩、富山藩の武士休泊施設の研究(その4)」(同第677号、pp.1757-1763、平成24年)⑤同「加賀越中御旅屋等之義御尋」にみられる御旅屋、御宿について一金沢藩、富山藩の武士休泊施設の研究(その5)」(同第682号、pp.2873-2879、平成24年)⑥同「金沢藩、富山藩における御旅屋、御宿、本陣の類型について一金沢藩、富山藩の武士休泊施設の研究(その6)」(同第690号、pp.1847-1855、平成25年)⑦増田晴夫「高岡と今石動の御旅屋と御宿について一越中国における藩主の休憩・宿泊施設に関する研究(その1)」(同第673号、pp.685-692、平成24年)がある。
- 3) 前掲2の⑦。
- 4) 深井甚三「加賀藩政確立期における宿駅在町建設一新川郡泊町の移転・再建について」(『交通史研究』第13号、pp.23-43、昭和60年)は、藩政期の泊の移転とその都市計画について明らかにしている。この研究成果を踏まえた上で、さらに文政期の町絵図を加えて、藩主の休泊施設と宿場町との関係を考察していく。
- 5) 富山県立図書館蔵。
- 6) 石川県立図書館蔵「越中国新川郡泊町高波破損ノ図」正徳3年。個人蔵「泊町新屋敷替絵図」享保年間。個人蔵「泊町屋敷図下図」文政2年。3点とも、『泊町屋敷絵図』(神濟歴史文化研究所、昭和63年)に所収さ

- れている。
- 7) 飛見丈繁編『越中の十村』(pp.342-344、昭和 33 年)に所収されている。
- 8) 「小沢由緒」で、先祖五左衛門は「本国尾州荒子之者にて慶長之頃御国江罷越」と、その孫与右衛門は「私方八世之祖父に御座候」と記されている。与右衛門から「〇世之祖父」と表現されるので、彼が与三左衛門家の初代ということになる。「小沢由緒」の筆者は 9 代目にあたる。
- 9) 牧野隆信編『加賀市史料 8』(加賀市立図書館、pp.1-25、昭和 60 年)に所収されている。作成年代は不明だが、記載される人名から正徳 2 年頃と推測され、この時期の大聖寺藩主は 4 代利章であった。
- 10) 「小沢由緒」に「与右衛門義宝永六年十月病死仕候」とあり、2 代助右衛門は宝永 6 年に与三左衛門家を相続している。
- 11) 前掲 2 の⑦。
- 12) 「小沢由緒」に「同(享保)三年五月大聖持様御旅泊之御御目見被仰付」とある。
- 13) 「桐沢記録」に「享和二年三月、飛騨守様御参勤、…御泊附…泊御泊 小沢屋与三右衛門」とある。滑川市編『滑川市誌』滑川市に所収される。
- 14) 「備後守様御小休所持留帳」文政 5 年、黒部市立図書館宇奈月館蔵に「泊旅宿 小沢与三左衛門」とある。
- 15) 朝日町編『朝日町誌歴史編』(朝日町、p.208、昭和 59 年)。
- 16) 「小沢由緒」によれば、7 代は文化 11 年(1814)より、8 代は文政 10 年(1827)より山廻役を務めている。また 8 代は嘉永 5 年(1852)に十村役も務めている。「列」は退職者に対する前官待遇を意味する。
- 17) 「泊町新屋敷替絵図」(写真 2)の町並みには名前が書き連ねられている。ただ苗字が記載されておらず、与三左衛門家の場所は明確にできない。
- 18) 森田柿園編『温故集録』明治 20 年、金沢市立玉川図書館蔵に所収される。前掲 2 の⑤が詳しい。
- 19) 金沢市立玉川図書館蔵。山崎明代編『越中古文書 越中史料集成 9』(桂書房、pp.739-743、平成 3 年)に所収されている。
- 20) 「神保由緒」に「生国御国新川郡山田村…享保三年十二月新川郡山廻役被仰付、同十四年五月荒又村弥三右衛門先組十村役被仰付、同年九月舟見野村四郎兵衛跡組江組替被仰渡、元文三年七月御扶持人並被仰付、泊町弥太夫組へ引越被仰渡…庄助儀者泊町へ引越泊町庄助与相唱、…延享四年四月病死仕候」とある。
- 21) 「神保由緒」に「寛保元年六月別家御扶持人泊町庄助養子ニ相成、…延享四年入膳村兵左衛門跡組十村役被仰付、入膳村庄左衛門与相唱」とある。
- 22) 伊東文書(富山県立公文書館蔵)に複数の由緒書が遺されている。本稿では天明 7 年(1787)と弘化 2 年(1845)の由緒書を使用し、それぞれ「天明七年伊東由緒」「弘化二年伊東由緒」と略称する。また『越中の十村』(前掲 7)にも由緒書が収録されている。編集されているが、多くの記事は伊東文書の由緒書と内容が一致しているので、「伊東由緒」と略して使用する。「伊東由緒」に「延享四年十一月六日…加兵衛儀新川郡泊町庄助跡組江引越被仰渡」とある。
- 23) 「伊東家文書」に書状が収められている。笹川村学友会編『笹川史稿』(笹川村学友会、p.86、昭和 16 年)に所収されている。
- 24) 「天明七年伊東由緒」に「同年(寛延元年)八月沼保村江所替奉願被仰付」とある。
- 25) 「天明七年伊東由緒」に「同(宝暦)八年七月殿様御中休被為遊御肴餅御菓子ホ献上仕金銀拝領仕其後度々御中休翌年三月五月御両殿様御旅泊被為遊御肴ホ献上仕銀子拝領仕候」とある。
- 26) 「御参勤御道中日記」寛政 8 年、「御帰国御道中日記」寛政 9 年、「御参勤御道中日記」寛政 10 年、「御参勤御道中日記」寛政 11 年に「泊御泊十村彦四郎」とある。いずれも金沢市立玉川図書館蔵。
- 27) 「御帰国御道中御泊附等」(文化 13 年、金沢市立玉川図書館蔵)に「泊御泊沼保村次郎右衛門」とある。
- 28) 「弘化二年伊東由緒」に「同(天保 6 年)三月御参勤之節私宅御旅泊…同七年四月御帰国之砌私宅御旅泊…同八年三月御参勤之節も同所…同年(天保 10 年)八月御参勤私宅御旅泊」とある。
- 29) 「御帰国御道中手控」(嘉永 3 年、金沢市立玉川図書館蔵)に「泊御泊伊東彦四郎」とある。
- 30) 「恭敏公御帰国日記」(安政 6 年、金沢市立玉川図書館蔵)に「泊御泊伊東彦四郎」とある。
- 31) 「覚(今般御改革に付御旅屋守・御本陣等名目廃止、及び地子米等停止申渡書)」(明治 3 年、黒部市立図書館宇奈月館蔵)。
- 32) 八十五郎は六男。喜三郎は五男嘉三郎か。勢之助は三男。
- 33) 岩城家は滑川を拠点に活動した堂宮大工で、彼らが遺した建築図面、大工道具が滑川市立博物館に所蔵されている。伊藤裕子、永井康雄、岡田
- 田悟、他「明治期における堂宮大工の活動について―越中滑川・岩城庄之丈の経歴と建築活動―」(『日本建築学会東北支部研究報告集』第 69 号、pp.145-148、平成 18 年)は岩城家について、永井康雄、岡田悟「越中滑川・岩城家史料について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2 分冊、pp.659-660、平成 22 年)は岩城家史料について、それぞれ詳しい。
- 34) 滑川市立博物館蔵。「町屋図一卷」と書かれた袋に、民家の平面図や意匠図などと一緒にまとめられている。図 2 の縮尺は約 500 分の 1 である。
- 35) 滑川市立博物館蔵。「町屋木口図并座鋪木割指図書院向木割指図」と題された冊子に収められている。図 3 の縮尺も約 500 分の 1 である。
- 36) 「天明七年伊東由緒」の 3 代彦四郎の項に、「同(天明 2 年)七月十二日十村役被仰付候」とある。
- 37) 伊藤裕子、永井康雄、岡田悟「加賀・富山藩における十村住宅に関する研究―平面構成及び建物配置について―」(『日本建築学会北陸支部研究報告集』第 51 号、pp.455-458、平成 20 年)が詳しい。
- 38) 富山県史蹟名勝天然記念物調査会編『富山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』(富山県、大正 10 年)に「明治天皇北陸御巡幸本懸御遺蹟」が所収されている。「泊行在所」に「檜ノ良材ヲ速ク飛騨地方ヨリ取寄セ御座所ノ工事ニ着手シタリ…多ノ模様換ヲ命ゼラレ日夜工事ヲ督勵シテ九月ニ至リ漸ク落成シタリ」とある。
- 39) 前掲 38 に所収されている。伊東文書の「第一大区小一区沼保村伊東祐明図面」も参照して、図 4 を作図した。縮尺は約 500 分の 1 である。
- 40) 「天明七年伊東由緒」の 3 代彦四郎の項に「天明五年十二月七日…無組御扶持人被仰付候」とある。
- 41) 米沢元健『加賀藩の十村制度』(富山県郷土史会、p.32、昭和 31 年)。
- 42) 「弘化二年伊東由緒」(1845)を作成した時に、4 代次郎左衛門は 58 歳であり、天明 8 年(1788)に生まれている。
- 43) 「弘化二年伊東由緒」に「同(文化)八年五月十四日父彦四郎儀諸郡復古方御用多ニ付同人元組当分才許被仰渡同年七月十三日右組平十村被仰付候同年十二月十九日御扶持人並十村被仰付」とある。
- 44) 「弘化二年伊東由緒」に「同年(天保 6 年)七月十四日せかれ彦四郎儀新川郡年寄並被仰付三位組主附被仰渡候ニ付私儀右組主附御省無組ニ被仰付」とある。文政 4 年(1821)から天保 10 年(1839)まで十村制度が停止され、十村役は「惣年寄」や「年寄並」に替えられた。
- 45) 前掲 2 の②。
- 46) 前掲 2 の⑥。

(2013年10月19日原稿受理, 2013年12月28日採用決定)